

COLUMN

鎌倉の猫事情 第三十二話

平塚に、バンパイアっていうBARがあるという話です。なんだか宇崎竜堂に似たマスターがやってるらしいんですが、どなたかそのお店ご存知ありませんか？その話を聞いてからずっとその店のことが気になってるんですが、その話をしてくれた方、色々な話をしてくれましたし、一方ならぬお世話になったのに、その方が先日急に亡くなられて。本当に悲しいことです。本当に月並みだけれど、人間の運命はわからないものです。で、結局そのバンパイアもわからずじまい。この先ずっと気になるでしょうね。気になるって、こと、世の中には色々あります。

何故か気になること・・・大抵は大した意味はないことが多いのですが、

実は何か大きな出来事の前触れだったりして、なかなか世の中油断できない面もあります。

気になること・・・この裏路地界隈に突如姿を現した灰色猫は、私にとって、最初から気になる存在でした。

ある日の事。ミルクホールの裏の小道に突然灰色猫が現れました。

あの場所は入りこんでいて、用のないものは、人だろうと、動物だろうと滅多に入ってくることはないのです。

近頃では時々アライグマらしき影が現れるという噂がありますが、いつもは車も自転車も入り込まない、草花で縁取られた平和で美しい小道なのです。

その小道に灰色猫が現れたことはこの住人たちにとっても驚きでした。

そしてそれ以来時折何か探るようにはしかし、余裕の表情で歩いているのを何度か見かけました。今思えば灰色猫は、狙いをつけたゲーニーの住処を探しあてていたのに違いありません。

彼は用意周到に、路地から家にいたる道筋、ゲーニー一家の出入りする明かりのついた窓を見上げ、調べ上げていたのです。

空が晴れ上がった気持ちのいい朝。とうとう沈黙は破られました。

灰色猫と、ゲーニー君の戦いの火蓋が切って落とされました。

花咲く小道で、にらみ合う灰色猫と、ゲーニー君。

静かな朝、彼らの低く唸りあう声が、ご近所中に響き渡っていました。

to be continued



SHIP

四海波静かなり。

船が、銀色の海面に白く真っ直ぐなラインを描いて滑って行く。

その前方には、見渡す限り穏やかな海が広がっている。

大きく沈みかけた南国の熱い太陽が光り輝いて、時間と共に夕日の暁色は水面の銀色と交じり合い、黄金色の皮膜となって、海面をつたい覆いはじめる。その神秘的なベールの下にある漆黒の暗闇と、邪悪な表情、恐怖の影は、今はすっぽりと包まれて沈黙している。

が、ひとたび何かちょっとし たきっかけでもあれば、それらはすぐさま本性をむき出しにし、そこにあるあらゆる生けるものを恐怖の底に落とし入れるだろう。

その時までには、静かな眠りについていて。

そのベールの下に覆われたもう一つの表情は、あらゆる生命の母なる源、無限の生命の輪、二億年もの長い長い時の記憶、すべての始まりと終わり。

矛盾しあうものをつつみ込んで、静寂のなかで大きな調和を保っている。

夕暮れが近づくと、いっそう大きく膨らんだ太陽が、自らの熱で光の中に溶けだしていくかのよう、じりじりと海の中に沈み込んでいく。太陽の最後の丸みがすっかり海に潜り込むと、もう一度空と海はバラ色に染まり、それを最後に夜の闇と交代する。

海がバラ色に輝くのを見て、ユウは山の中で死んだあの若い男の帽子を取り出した。小さなつばのついた子供っぽい青い帽子は、空と海の間をバラ色の光の中で色褪せて見え、本当にあの男が被っていたものかと思うほど小さく見えた。

海に出たいと言った彼のその青い帽子を、海面に向かって大きく投げると、帽子はバラ色の濃い方向へいきおいよく流れて行き、それが見えなくなる頃、空と海は闇の中に消えた。